

## 原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成30年5月9日（水）
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：更田委員長 他

### <質疑応答>

○司会 それでは、御案内の時間になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。

それでは、質問のある方、手を挙げてください。では、タナカさん。

○記者 雑誌『科学』のタナカです。よろしくお願いします。

雑誌『科学』5月号では、「2013年汚染米問題をなかったことにした原子力規制委員会と秘密会議」という論文を掲載しております、既にこの掲載号はお送りしているので、御案内のとおりです。それで、委員長に改めてお伺いしたいのですけれども、2013年8月に福島第一原子力発電所のがれき撤去に伴う線量上昇と、2013年の秋に南相馬市で見出された基準値を超える汚染米の問題との関係について、どういう認識でいらっしゃるか、改めてお伺いしたいと思うのです。

○更田委員長 確かに当該雑誌『科学』というのはお送りいただいているのですけれども、今、御指摘された記事は、ごめんなさい、まだ私は読んでいなくて、その記事の内容については承知していません。今、質問の中にあつた2013年8月のがれき撤去と、それから、2013年の南相馬市のお米の話ですね。どういう認識を持っているかということ、私は因果関係はないという認識を持っています。

○記者 もう一度確認しますけれども、あの当時というか、その後、原子力規制庁ではシミュレーションをなさったと。そのシミュレーションの値は実測値と大きくかけ離れておりまして、一番大きくかけ離れていた双葉町の測定点では250倍違っていたわけです。それは実測値の方が250倍も大きかったわけですね。しかしながら、そうした過少なシミュレーションの結果をもとに、以前の田中委員長は計算値の方が信頼できるというお考えで、関係ないとおっしゃっていたわけなのですから、そのお考えは変わりないのですか。

○更田委員長 私は田中委員長の判断とは独立に、今の時点で因果関係はないという認識を持っています。その当時、田中委員長がどういう根拠に基づいて、どういう見解を言われたかについては承知していません。記憶にありません。ただ、私は1F検討会にも参加をしていたし、南相馬市の米の問題については、適宜情報を得ている立場にありましたけれども、がれき撤去のときのダストの関係や、そのときに近隣で測定された線量

から考えて、南相馬市の米に対して福島第一原子力発電所の事故の廃炉作業との因果関係があるとは到底考えられないという認識を持っています。

○記者 というのが委員長の認識だということなのですね。

○更田委員長 はい。

○記者 御覧になっていただいているのですけれども、お送りした記事では、調査を始める前に委員長は、規制庁は関与すべきでないと判断したという。

○更田委員長 その委員長というのは田中委員長ですか。

○記者 田中委員長ですね。ですから、更田委員長とは関係ないのですけれども、独立の判断なののですけれども、過去にこういう事例があったので、これはどうお思いになりますかということをお聞きしたいので言っているのですけれども、調査する前に、当初はこの報告を受けて規制庁は好意的というか、前向きな応答をしていたのですけれども、2014年の1月になって、田中前委員長は規制庁は関与すべきでないと、調べる前にそう言って、途端に態度が変わるといことが生じたのですね。この記事の後半では、2014年の7月には、これは内閣府の方ですけれども、原子力被災者生活支援チームが秘密会議を招集しておりまして、因果関係については不明とするという結論をあらかじめ先に出しているのですね。そういう申し合わせというか、秘密会議をして申し合わせをしていた。こういうことがあってはよくないと思うのですけれども、委員長はどう思われますか。

○更田委員長 おっしゃっているとおりであれば、今おっしゃっていることを聞いた限りにおいては、よくないように聞こえるけれども、事実関係を私は今、把握をしていないので、事実に対してどうであるかという認識は申し上げようがないですね。

○記者 分かりました。改めてなののですけれども、2013年のがれき撤去と南相馬市の汚染米の問題についての認識は先ほどお聞きしたとおりで、その点について、新たに計算し直すというか、認識を改めるような研究をするつもりはないのでしょうか。

○更田委員長 認識を改めるための、むしろ因果関係がないことを補強する材料であったとしても、今、私たちは明確に因果関係はなかったという、私たちというより、少なくとも私は明確に因果関係はなかったという認識を持っています。さらに、今からそれを補強する材料というのは、シミュレーションなんかをやってみたところで大した助けになるとは思いません。ですから、工学的常識と申し上げると、ちょっと偉そうな言い方かもしれないけれども、福島第一原子力発電所のがれき撤去作業と米から出た値との関係を結びつけるのは無茶だと思うし、私は因果関係はないという認識に変わりはありません。

○記者 分かりました。

○司会 それでは、フジオカさん、お願いします。

○記者 NHKのフジオカです。よろしくお願いいたします。

大飯原発4号機について伺います。今日の夕方5時にも4号機原子炉起動の見込みなのですけれども、福井県内ですと、同じく大飯の3号機と、近接する高浜の3、4号機とあわせて4基が稼働する状態になりまして、複数のサイトで同時に事故が起きた場合に備える特殊性というのはあると思うのですけれども、改めまして関西電力に求めることと、そして規制委員会としてどのように対応していくかということをお聞かせください。

○更田委員長 複数基であろうと、1基であろうと、潜在的なリスクを有する施設を運用する事業者は、当然のことながら高い緊張感をもって取り組んでもらいたいと思いますし、これは関西電力だけに限らないけれども、一定期間、比較的長い期間、停止をされていて、今またそれを運用するという形になったので、特段の注意は払ってほしいと思っています。やはり経験の蓄積であるとか、それから、これは数値化するのはなかなか難しいけれども、現場の意識や勘というものはとても大切なもので、そういったものについて、懸念とか不安とかという言葉が直接的に当たるとは思わないけれども、しかし、やはり一定期間停止していた施設を再び動かして、今、関西電力としては4基の運転という状態になったことを踏まえて、きちんと高い緊張感と、それから、ふだんより幾分高めたレベルでの注意を払ってほしいと思っています。

○記者 関連しまして、今年の夏をめどにということで、大飯と高浜の複数原発事故を想定した国の原子力総合防災訓練が実施される予定なのですけれども、例えば、住民避難手順など、こうした訓練を通じて関係機関にどういう対応を求めていきたいか、また、規制委員会としてはどういうことを確認したいとお考えでしょうか。

○更田委員長 これはこれから内閣府の原子力防災を中心に計画の提案がされて、さらに地元との協議もあって、その上でどういった想定のもとで訓練というのが進められるのだろうと思います。その段階で原子力規制委員会も相談にあずかるというか、意見を申し述べる立場にあるわけですけれども、総合防災訓練という訓練の性格を踏まえると、プラントに想定するシナリオというのはなかなか難しいものがあって、これは今までの原子力総合防災訓練でも経験したことではあるのですけれども、住民の方々の具体的な行動も伴った訓練を行います。

それから、政府の多くの関係者が参加する訓練の形態をとるので、どうしてもある時間までに、ある状態に無理やり持っていかなければいけない。ですので、プラント側の想定に関しては、どうしても技術者の目から見ると、荒唐無稽なものにならざるを得ないのは致し方ないと思っています。むしろ総合防災訓練の目的というのは、どちらかというと、指揮命令系統の手順の確認であるとかというのが政府側であるし、それから、住民の方々には実際の行動の一部を経験していただくということにあるだろうと思います。

想定については、これも議論が難しいところはあって、防災訓練というのは、極端な想定を訓練をしておけば、それよりも緩やかな事象において対処がスムーズにできるかということ、そういうものでもない。ですから、どの頃合いの想定で訓練をするかという

のはなかなか難しいものですが、ただ、総合防災訓練は、そう頻度を高く行えるようなものではないので、やはりPAZ圏内等々で周知であるとか、連絡であるとか、そういったものの手順を大きな規模で行う比較的初歩的な訓練というような位置づけにならざるを得ないだろうと思っています。

ああいった総合防災訓練だけで訓練が全て十分になるというものではなくて、むしろ机上訓練であるとか、机上演習であるとか、あるいは小さな規模の訓練の積み上げであるとかというのが重要になることは言うまでもないと思います。

ちょっと御質問にあった同時発災について、これは私が今日までに聞いている限りにおいては、まだ想定がそんなに確定したものでもないと聞いています。例えば訓練というのは、考えれば夜間であるとか、厳冬期であるとか、そんなさまざまな想定があるだろうと思いますけれども、総合防災訓練は比較的中中で夏に行われるという形ですので、その時期特有の厳しさなどは踏まえて行われることになるだろうと思います。

同時発災については、繰り返しますけれども、まだ方針といえますか、大枠の方針が固まったとは聞いておりません。

○記者 最後にしますが、住民の方の目線で考えますと、4基稼働するというのが数年ぶりといえますか、長期間空いた中で4基稼働なのですがけれども、改めまして原発事故が起こった際の住民避難の観点から言いますと、この4基稼働の状態というのを規制委員会としてはどのように見ていらっしゃいますか。

○更田委員長 どのようにといたしますか、3基と4基で大きな違いがあるかという、そういうものでもないだろうと思います。ただ、一つのサイトに4基あるわけではなくて、二つのサイトにあって、ですから、それは当然、心理的な影響、例えば避難行動であれば、シャドーエバケーションみたいな用意された避難行動ではなくて、自発的というのか、動かれてしまうというような形態が考えられますけれども、そうすると、二つのサイトでそれぞれ2基ずつ動いていると、そういった心理的な影響等は出てくるのだろうと思っています。

それから、ちょっと具体的なことを申し上げると、同時発災したときに、オフサイトセンターが二つあるのですけれども、どちらを使うのだというようなことは、この訓練でも同時発災を扱うのであれば、私たちも研究・分析してみたいと思っています。それぞれのオフサイトセンターの特徴がありますけれども、同時発災したときに、高浜を使うのか、大飯を使うのかと迷っている時間はもったいないので、そういった意味では、個別具体的に同時発災の際に考えるもの、それから、自然災害との重ね合わせを考えたときというと、自然災害の状況も見てそういった判断をしなければならないので、そこら辺は具体的に訓練からいい教訓が得られればなと思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほか、御質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。ナカムラさん。

○記者 日本テレビのナカムラと申します。よろしく申し上げます。

明後日、金曜日に山中委員が東海第二原発の視察に行かれます。こういったところを見たいかという目的について、改めてお聞かせください。

○更田委員長 東海第二に関しては、ある意味、ピッチを高めて審査が進んでいるところですので、そういった意味で、ああいった審査を実際に経験すると、審査の序盤でまず一回サイトを見て、そのサイトの特徴であるとか、状態をよく把握するというのもとても大事なだけけれども、やはり審査会合やそういった途中で資料の提出等々を踏まえて、自分の中でどんどん知識なり、理解なりが深まってきた段階でもう一回現地を見るというのは、とても意味のあることなのですね。

この段階で山中委員が行かれる場合というのは、やはり許可、不許可の判断にかかわらず、今、特に重大事故等対策に関しての議論は一定のレベルまで進んだところですので、そういった意味で、知識や理解が深まった段階で改めてもう一回サイトを見るということは、十分意義のあることだと思っています。

○記者 ちょうど1か月前の規制委員会、4月に、山中委員が原電の東海第二の審査に関する質と進捗について厳しい言葉で言われまして、その日の会見でも委員長も厳しいことを指摘されておって、それから1か月がたったという状況です。4月と5月が重要だとお二人とも言われていた4月が過ぎて、5月も間もなく残り半分という状況ですけれども、改めてになりますが、この1か月間に進んだことと今の審査の状況について、改めてですけれども、どのようにお考えですか。

○更田委員長 確かにおっしゃるように、そろそろ非常に場合によっては大きな判断をせざるを得ないような時期に差しかかっているのだと思っています。ですから、5月の下旬から6月の頭にかけて、特に私たちに関心を払っているのは、工事計画認可を受けるに際して新たに試験を行わなければならないという説明を受けている部分があって、試験というのは試みに行うものですから、あらかじめデータは予想がついている。全てのデータについて完全な予測がついているのだったら、試験をする必要はないわけですから、そういった意味では結果を見てみなければわからない部分というのがあります。

今はまだ私たち、少なくとも私のところでは、原電が行った試験の進捗とその結果について報告を受けていませんので、それがやはり今申しあげた時期ぐらいいまにはきちんとした結果が得られて、そして、工事計画認可を受けるに足るような、きちんとした根拠になるようなデータが得られているかどうかというのが確認できるかどうかというのは非常に大事なポイントだと思っています。

○司会 イワマさんはいいですか。わかりました。それでは、ほか、ございますでしょうか。よろしいですか。では、オガワさん、最後。

○記者 朝日新聞のオガワです。

先ほどの東海第二の件で、先ほど委員長は重要な判断をしなければいけない時期に差

しかかっているという御発言があったのですけれども、それは5月下旬ないし6月上旬という理解でよろしいのでしょうか。

- 更田委員長　すごく正直に言いますと、実際に審査に当たっている部隊は、判断するまでにもうちょっと待ってくれと、もうちょっと時間が欲しいというようなことを言っているのは事実なのですね、6月の末ぐらいまでと。だけれども、委員会としては、そこまで待っていいものなのかどうかというのはちょっと思っています。

というのは、皆さんも御承知のように、東海第二、運転延長認可との関係も考えると、工事計画の認可を受けなければならない時期というのが決まっていますので、それに対して、例えば到底判断ができないという状況なのであれば、これは審査部隊だって他の審査案件をいくつも抱えているわけなので、6月末まで果たして待ってもいいもののかなと私は思っているのですが、できればこのまま判断に向けて走れるのか、それとも一定の期間内に判断を得ることは難しいという感触になってしまうのか、これは6月上旬ぐらいがポイントになるのではないかなと私は思っています。

- 記者　日本原電の説明ですと、データの実証試験の提出というのが5月末までにはしますよと言っていたかと思えます。そうしますと、規制委員会としての判断も、委員長としては6月上旬ぐらいにというようなお考えでしょうか。

- 更田委員長　取りまとめられた試験データを見て、じっくりゆっくり考えているという時間があるとは余り思っていないで、ただ、審査に当たっている職員たちからは、やはりそうはいつでもとって一月ぐらい欲しいという話はあるのですけれども、果たしてそこに一月かけていいもののかなと思います。

ただ、いずれにしろ、これは結果を見てからでないと、はっきりしたことは申し上げられない。微妙なデータみたいなものが出されたときに果たしてどうするのか。これは今から余り予見を持ってしまうべきではないことだと思います。

- 記者　ありがとうございます。

- 司会　それでは、本日の会見は以上としたいと思います。お疲れさまでした。

—了—